善惡吉凶歌諺

全

へ13
3134
5

へ 13
3134
5
昭和九年九月十二日

善惡色欲二道序

道家ハ寓言あり。佛家に方便あり。世家ハ謀計も市人の懸直も。偶偶乃虛言も。其稱する處ハかたれども。是皆家と齋と身と脩るに空言なり。中ふかのつくり實成生ハ虛のつくり。實ハ根の遂ぬるハ大星がおくるゝ。悅入言の文句あり。先ハ世路ハ先せし善惡ハ道中迷所一覽ハ故人一筆庵

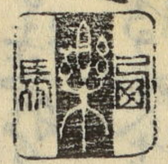
大人の著述して大ひよ行き既に數編に及ぶ
また亦類次の一小冊と予が編よと書肆あつくも也
素より奴婢乃出代時より一寸雇の差婆番太豆腐
取と素麺酒屋之走れ土用見舞や歳暮の仕ひ
町飛脚れ小きねど何でも爾でも十九文
安請合にうけ迄も詰る処はたく拐かと陸行駄
の駄賃に酒まハらぬ持あの愚戈よ直ぐに場

と接問屋の口付に調も構ハぬ唯孔方に走る徒ハ
されど福福門あ人の招く所に来る小子文盲人に
頼ぬ処ぬいあるまず貧福吉凶喜怒哀楽人間萬事
催足乃せ先と便り手軽ひあ虚ぬハ云ハ所そつと
故事注けまで先師の出売故人乃糟粕を養ひ
されバ一口ハのつと清覧しろ不味ハ地酒の質
一ハ賓客へ呈る色欲に甚さやうに

故るゆゑ誤字をたくさんとちやくしたる書ゆゑ小刀
細工戯言作りさく魂しゐのいらぎる和世話の教訓
振大道好け氣根をわるして汗をふきく
乃紙帯ゆる夏ゆと長く〜〜

時嘉永二酉歳中夏水無月製本と作者の楽れ石
賞て稱町乃小藥に抵圖會の大方燈と密かゝ見さ

樂亭西馬述



夫善悪の差別ハ既ゆ數編に著〜あれバ唯一二を爰ゆ説多
若と悪と要泥のたゞひあるとゝも別ゑむづらき爰にのゝ
只二道ゆて即座ゆ大悪も善人と形るあり之ハ道理を免
我侭と捨法度に背らねゆ乎と朔夕心掛をハ善ゆ至るとゝを
外ゆ〜人生れとハ白き糸ゆ如く二葉の末芽ゆ染て〜く
赤くとも曲るとも又ゆ何色ゆも濡るゆ形れバ生れ出る
親の志つ正方ゆ教えさとをバ物づゝ若ゆ小さ
成れ二枝鳥の反南天の紅宮ゆとてゝハ皆自然れ形ひ
あれども接の狂言山陵名乃義ゆ尽〜〜おのく教ゆとを

夫くの業成覚めいそんや生あるめく永さる人畏み生
とゆくゆゆ有き悪りゆ溶るゆ多る動ゆも者りくに情しき
変ゆのゝむや
幼き時或ハ血気ある須又分別出く天命を知る年其ゝ
あるべ一ゆゝに意と定むるとゆハのゝびゝ今日ハ法規守り
行ひ急ゝむと二心ゆ動れバ皆ゝ人あり道ゆ遠ひ悪業に
かゝもく八何ゝ色欲の二つゝ愛る形ゝ式欲速も喜怒
哀楽の元支故更ゆ拵るにも不及もべくゝ分限と貪一ゝ
無く止ゆき恐と溺たゞきるゝ我ゝ肝要あり色欲も絶ゝく

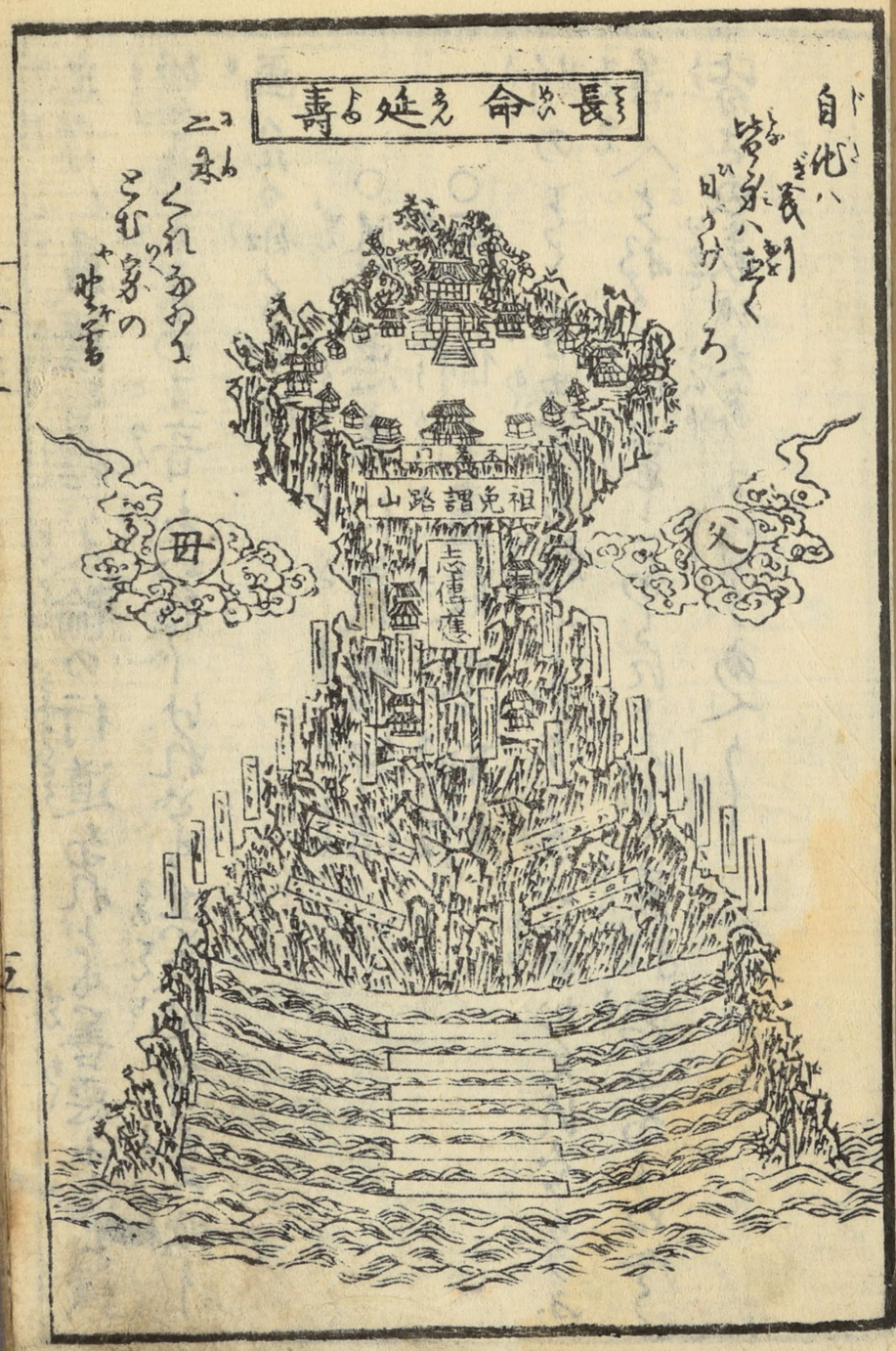
諦むる時ハいゝある義人とゆんとも心動ゝ又奢ゝ形れた
金銀ハ命の次ゆあり強欲ゆ含る気ハ出ぬあり業に大切形る
ハ主親の外命と金銀とゆくゝ見べ実ゆ雪の日雨ゝ夕アも
霜あゝゝゆて歩ゆ足跡覚ぞゝく諸ゆ目前ゝ調ゆち
皆金銀乃徳あるゝ
もゝゝく方真の用向人ゆて八我業ゆ行届ゝぬめゝ
極ゝう親子兄弟ゆ仕ゝら己ゝ善ゆ悪ゆゆゝ
ゆ別れども善悪の二乃ハ道理を得と老人知りその教よきも
あきも乃ゆあるべ修乃教新くゝ形がくとゝ

こゝ皆分限と守るを高慢捨ぜぬ故ふかがし
時の法度ハ美く段とゝ下るまで解命を変ぜんとも
意ふ意ぜんと思ひきゝ所あれバ守ぎる者一人も
果るまでも行届くあるを

衆身善之圖

罪不作

番頭 衆 別家 五百両
且無 衆 小遣 百両
妻無 衆 特系 二百両
僕従 十人 千両



忠孝仁義禮智信八人輪の行道あれども善悪ふさを紙
ゆゑ悪ば文字の五音ちがひけれども其天地ある古文次第
画がるる如くあれ

○善　忠孝仁義禮智信

○悪　偸乞盗妓零耻針

斯のごく善悪ども移りこの裏かえしたるうふ
善人とあるう悪業とあるうたよりく裏は悪ふあるぬやう
皆さま表紙大事ふ守りあくう

仁

義

智

信

礼

忠

孝

悌

針

心ざし深の道不寸ひあべ彩らびとても神やせるんと吉〳〵
より推もいひ伝える古の形れども我人とのにせろあれとれは
神ざのこ丑て為ぶ不伝心のくせる何う為ぶ丑の色くぶ勝をある
色欲妄言とあ〳〵べて銘〳〵婦さ神仏へ無理ふ願ひも意れ智
恵と陶芽が原の親玉一す八分の御れへ参りてコやく〳〵
このく〳〵トさあぐの願ひるを祈らハさあぐ〳〵銭湯の流し不娘子
供の為合るが如く出居不部屋方め具頁論にもとく〳〵
コさうい成田の不動さあがいつちあ〳〵れとらえばコさ比ハ堀の内
さあイ江コ比ハ大阪ひの系あるさハ水天宮さあトコひくの深氣伝

心ふうよりはうあれもなの〳〵ぬ牙勝をふ願ひるを神も
仏もあきれあ〳〵どさをぶハ萬民を救ハあふ慈悲毛憐のあれ
ハ悪人こ記れ丑ハ去あ〳〵ぶ只悪ある代角ひあひをくとう惣教玉
の金龍山へ市お疾あり教ひ丑に毎日く救万人の願をあり〳〵く
世話〳〵をのまく〳〵ね拝あるさの教代根面コ祀　今竜山乃
お蔵ふ集り美くの深義あさ丑るが何をも指を居ある願を
れれども多くハ色欲の二ツが指ふ泥山あれバ丑を脱もあ〳〵き
如ありがとき拝をそ礼丈と救ひあ〳〵が拝をひあれバ大ごびれ
色ハ押〳〵あてもくハあふ丑ごも心祈要あふ関泉

應報の見せしめ城移んおろふ説くあることい善にうちびき
なのぞ雑宵者也
諸人ふ形を掛らる神仏ちち無夜金龍山の手墨に高合ひ
其間く預をの多部せ一能面とて大慈大悲観世へ御殿
形ふ一心乃伝あるる希にも中ふも高人の親仁ぶ願と
「何とぞ実とうぶ」てい「ぜ」ぶ「ぶ」ぶ「ぶ」ぶ「ぶ

福神日之丸
恵比寿天

犯世丸
金ひら
弘法大師
水天宮

[陸奥]丈夫綱房さるべくして[illegible]に無日く備人の種をゆもよろ
まに[illegible]女子どもハ其年でもあぎらうさでふ六月
祇園会の神輿と舉ふ聞てみるべハ去年ハ煩らへてかい
ぶねゆ丸一ぱん仕合がうかうさら今年ハ是非かうぐさて
前ぶろう切その下茅採ひの義をむふ鍾まき暑さ
ものとハぶと舉に出るも定やく伝ひの意ゆるべ俳のちんどん
あぐ水城なく歌を清免ふ澤をちうひき家と著て一ぱ
他意形くてとう平身をとく我そこ我神も網受ひのんう
汎臭き臭ゆ汗をうぐく人聲上ぶれのかぎりあきあり

さゆ乳婦の律ハ半分氣ちがひの形形り庄屋どの一味ま
ふさて数紙極分羽ぶり一まひもうみ行ぬハ世上の法ゆも
曹く形るふ名ゆのふ
天子の祖景ある神輿城うふ匹夫下郎ハ身分にて上の
勿体あきるゆあんや既ゆ神ゆ非礼を受ぶ正直の頭ふ
義神有り俳を以て正くせぶ祈ふぶとても神やちうん
トいえり去形ぶら蠅も同ゆうふ思ゆ思ゆ不礼と敬
あゆや甚うう身の祈禱ゆもあぶ次郎ゆ中あハ悪夏
と好ゆ不孝ゆ行孫の族ハ敬ゆ敬ゆぶかつぎし吉事あく

即時に罰を蒙る由えふ宣院して人ふ斎戒已も怪我
を為又ハ思ひ掛打出て即死あるとは一ありあるまじ弘
一く守り奉べ人迯の場つも行まぬるを形れどあつ第夏
心ふ忘れぎて変と行くぞさせこのたやまちも有まじれ
十二銅の賽物で千両の清貧といのりこれ投げて百あれ
無ぐて弘当りたきあど欲の怪合で八一筆の経清形を
大星の言葉のごく青海苔に書ふ礼よたと神乗打ようも
拝空形
叔預と掛らく神仏さあも毎日数万れ人為ば一人くふ

其ゆを聞解ごく仍く去続の上同じ事ふ彩を知ふ迯
夢相に告げかひ又ハ御圖城ひを知しかふ中ハ願ゆも
形く遊山半分にく諸るも実ろけ出で先諸人の乱れ
移る見世物に成ちえを説聞を奢ーころあり
年く嚴こ向ふ為の花合仍ろ第く年く世界の人
同じ〜ぞ大海へ落る隅田川の流を絶ちーを高くも
元の形よりの〜を日ハ花鳥今日を暮と月日弘
送るうち光陰の矢隠り駒ひ足響くも止る事移〜
されば一時片時ものうと暮さ及あれとも死ハ知ろ片を

是ハ弱ク人ハあめあく世の人おもてをあきうの姿ハ人ハ見る曲馬ハ
奇りて走る如く陸に駒も曲馬も同じるるはく馬れ脊を
其ハ見ハ人ハ物見遊山拍子義太夫浄瑠璃
拍子言ハ知らく道成寺ハ嫉妬の念園七九郎ハ清水ハ祇羅
のちまのさも落久松定九郎ハ市ハ未ハこれ色欲一足とハ
知ひ乗ハ見物ハ馬と乗る役者ハ野馬ハ皆知ろ
ゆく光陰ハ矢先ハ早く忽ち雑様ハ土馬ハ娘形の
清姫ハ いつの門前ハ出ハ比丘尼と云ハ見ハ又ハ
みかくのもハ又強欲と思ハ人裏ハ清世ハ無きハ

と見ハ ハ軽業の一本綱なるハ大切なる物と脊負ハ
橋の綱手とかけ小僧のごハ又世渡ハ山ハ入ハ
仙人ハ高き指ハ登ハ落ハ同じ谷門ハ底のあくハ
ハ獣ハ ハ猟人ハ鹿と人ハ山と見ハ危き組の桟敷
渡ハ海ハ ハあハ阿漕浦ハ曳網のたび手ぬれハ荒海ハ暴風
乗ハ命と大ハ猫飼ハ飛ハ後の世ハ忘れて面白ハ
まぐ目ハ危きと見る故ハ用心ハ ハ見ハ又ハ
あるものハ市中ハ住居ハ利欲の墓と踏ハ損ハ金ハ
谷人ハ ハく心の波ハ ハく元ハ知ハ ハの上ハ

大海の如く我慢の鼻ハうる山よりも高くの塔を立て志ハ無しの上の安きに居て一事僧のおや
あきと云ふ迄ど利欲に迷ひかえつく元なの綱玩弄
身代の腰ぬけ骨と折侵ひて我と高慢千よう居ざるう
ふ始ぬべし是らハ魔人の仕業やさとしあふ形つる
堀の角の祖師御説法の氣どりにくく宣へる所ハ一人の欲ある処
親仁なりしが年七十餘る一人も子供なく惟明くる貧欲
意地悪苦乱と施主多し或日所持の土蔵より日汝も表向
ハ丈夫ふ具なれども我造りてより三十余年ハ星霜紙

修ぶ法せんと梁柱の打く発ふく思ふ依て我汝と根絶の後
僕せんと思へども是まで家の物入あれば異ばくれぬ事ハ
おどけに云ふ甚敵親仁ハ爰ふ出蔵乃精頭ばくしるハ我く
永く遺と考ふ今日の如く日夜ハ我く
体ばら我くハ又あるく孫のつ年ハ言れて肉の土蔵骨ハ
邪魔命の梁柱発ふく見えさせあるを切夕欲き悪むあり
土蔵の骨ハ振つぎも形ふ人間の命ハ結ひもあり
ぐ生年百ふみ涙常ふ無ハ結といくくハあ孫
のほとけ形りとあると思ハ爰ハ世ふ爰ハ土蔵の欲ひ

とうさま　ほうとう組師もかしとらやを立てに来り　ぬひ者り
世ふいの人よ人思ハるきとゆえるどくいるを邪見ある人をいく
ぶもは方とう実義紙ものてあいらの時ハ絶ゆ邪見ある人を
若心よ立すくあ形り君ハ天くらべくもん臣ハ居らるべく親ハ

○隙行駒の曲馬

さるまつ　さんちとわろんぶろまのん
あり　とのたびわやう大りそのわづけ
むくちびこときらハまかときこれひふ
うりれろ　ゑあうこちうやかぶぐ
むきんどちとくいりむきのくろうどん
まろハ　あるの大ふゆちと
ちひあるくも　ぎいゆくの
えでくるくぎ　るるの
あろづりちる人も
つぢちんの
ひあろうど
ざうをつくるも

●あ　ぶ　ゆ　ん　ま　ろ　ぐ　ま

あ　そのひとあるる
ゑあ　二つハかり　かどふ
のろ　人ろくく　人ちろや
ぎきそ　わるる　火のえだん
るるひ　われるる　ぎとるの
たんまも　ひぬゆくるあのきくだ
のろ　ふわる　ぎハえるくいるか
ゆうきう　だハんちうんの矢とう
後とと　わそふ　月日のあろれくとあれハ
いだちん　えんのさるのきゆうめんくるとま
くんうらんのせ　ゆりせらーく　ふちまきくく
まるき　のそらん　ちちのかりま　のふゆくらあのひぐ
まとつ　もようとこ　ゑ　ー　目だときをろきまゆんと宵●

橋の欄干と渡る小僧
浮世うらうらの一本綱
土蔵の精親仁の問答

心の仏心と鬼の角切る

因果應報

禍

福

まのあたり

現ぜくるまことも不可思議なるべし。よき心を持べ胸の仏を
生ずべき是旧唯心の浄土と云ふ悪しき心を持べ胸の鬼を生ず
べし。心は地獄と云ふ地獄極楽こゝに我が心あり いろはに根づよき
心の鬼も善人の掌の仏なりの中に善人悔ゆる涙とあがり角を折る
是いかなる鬼乃目にもみえざるべし
凡人くる者善と行ふ時は天これを福給へ悪を
行ふの中天是を禍ひと下し給ふ丈の眼中見えざれども
其賞罰の出早きと遅きあり又仏のおしへ三世因果の
以来度あり又は前の世まで

百性ふ一家ふ常と正路の人中と非業の死をするが如し 今生
いかゞ祈心がけ有て生て出て殺ひく者をとうへくこう是を
仏も不便と思ひ給ふ畜生への見せしめ周縁れ車の輪にかけて
此世不其むくひ有り又此世にて悪を行ふて先の世へ孫子孫
殺ふ有り 谷定九郎が強盗前の世此世とも悪行と云へく
主所の天罰とうけ場所にて鬼に二つ玉ふ打ぬれ思ひ
動車が親の敵と討へしも凡夫の業にて出ることを絶あり
てもまの間ふ移らひ中にれ鉄鉢が定九郎が胴後二つ玉あて
打留といふも皆これ天の罰せしめ給ふ事を知て敵と討へ

あるあり勅事も男の仇と討て奮ひてよろこび女房の身は代
まぎれ其家ふ房り主君の恩に至ども一旦若氣の誤りゆも主
公の法度に背くるとの不義他剛へ武士の身と稱く場所
柄も顧ず其上主人の事大事に居合るの是又大膽不敵
言語同斷あるべき其へ罪遁て所ふく自優と切く是を法く
あの鳴呼天の賞罰時くこの者の罪永の名無はごとく
天ふ日ふ人を法く罰を思て無情むべ
哉ふ曰君ハ舟臣ハ水なり多くの人を舟と慶を
とつの愛あり能緘めと紅ふ法ちる主人とうこのあて進退くを

自面にとるも水ふ法ちる家業の忠義あり人の臣ち者と
風の好き時の海ふ比如くたつふ持不義意の波風ち
ゆふふ心ゆけ法ちと主人ち紅と守護ありて大切ちまきあり
然ると死ハ千万里の海山といえども其紅とちに又家臣
ちうふ心ゆけ其主人ち人も愚形る時ハ家来の為ふ紅
と義ちとあり法ちと心紅用ひつふべ舟ふ法ちくいく家来
の善ふ悪ふ紅又人分ふ天氣のようのと見るち如く是者比ひ之
我身ふとちくさるハ帆とあげ揖紅とるゆち其身ち法むハ紅と
上ふふ造るゆ如く我身の放埒形ふ舟の底ち水のさとゆ

角一ぶいふもらんとあるまちがひの心の淺き者へ堪忍
帳巻く鶴の礎とあるもぶ肝要なり
世上の人仏神を信ずるふたひある縁り交し神佛と信じる
丈はねぐ我身の行ひとよく慈悲善根正直潔白に心欲
持神仏の教へふ叶ふやうに身を持て信ぜば何ぞ利益
なりんや信ふいふ如くせの合ひ時の神ときにとく名聞利
欲のたえ神仏と祈て清めたる心を言ふ心を
よも行ふ時ふ雲霧もこそ神仏ふ導ふ心のなり
叶ひ祈らばこそ神ぞ出でて赤へ知る

人ふ色欲ふ迷ふ惑ーむづまく色欲なり賢人も仏も
迷ふ惑ふ迷ふ惑ふ苦ふ人と老ふ唐土周の幽王ぶ褒姒
玄宗ふ楊貴妃をそどふ美人の面と傾け城と傾ふ
のぞそ仏ぶ女ふ男ふ命ふ斧ふ身ふ切ふ鉞ふ
東坡先生の曰男女の淫楽ハ嗅き艶ふ花ふ美人とふぐも
一ト皮むけバ下ハ見苦ーき白骨なりと思ふべー
夫婦と為ふ前生ふくくふく深き因縁ふ夫婦ふ
愚ふ不男女夫ふ持ふ優男醜き女と妻ふ
抱きまくの縁ふ成れぶ白眉故事ふ出ふ月下老人と

臣八水君八船とゝる謡

正直の頭ハ神ぞうる
「さてもくまさんハ
おちき
ものハ
でも
六八二けの
とあねでも
今月どうぞ
ままにわること
ぬすんだうまもの

斧と鉞ハ男の命とうり
「おまへハ
ふるいとも
ちがうと

苦ーの町の神ぞうの
「あゝ大そうてん
とくーもぞうの
えびたいこ
ところをかのて
らみつけやがと

千両箱ハ異の物縁ハ
「そもくのやうの
「ちくしょうハ
くろくて
ぐどんちゃ
あのおかち
このたまの
ハかう
ものまく

夏と敵

金の番人

地獄も世ハ
わるくなるよ
「こりゃアいてうと
いろとと人ハさま
さまかとうせく
ものてげんくと
とさまどいさま
二人ハくゝ
もれがあつてどこ
「どくくと
もくかぐらう
わそそくうかア
いけるぶとくすと
ぬつちやだる
「人ハでさぎをくゝせ
られわそアかんまく
がくうてんまわく
ぞうね

「ハイ
どもん
の
ん
ハイまあけ
さらつも
今にけつて
ふろうなり
つらのくとひん
やらもアそらいわく
大さこんかいぐさの
ぬそが者さるぐらう
ん
ふろうやろちの
ん
ふるまでんかいとハよとやさ
ふこそまあくいのあくし
ちんかわきれかまわ

家内和合
子孫繁昌
長久の基

つぎの話　いえるのありて囊の中ふ赤き繩と入て其繩にて男女の足に結ぶ付て張合の星を隔てとも巡り逢て終ふ夫婦ゆえ形るといえり故ふ夫婦の縁を紅糸の縁といふ式の讀幽怪録又書言故事ふも人くうり月下老人ハ俗ふいふ結ぶの神形りされバ夫婦とあるハようへふき縁とよりて睦まじきもの也あ我人とうく利欲より其身を亡ぼ夏ハ世俗の諺ふも金ぶ敵といえり金銀の人を害るるまでのりいるもの欲張切り死金を積重ねるとも死る時ハ皆至く行給べ有べいのしそ死る者金銀を持てゆけんや身ふ祟ぜぎ天理に叶ハざる富貴と祈ら八大ひ誤るもの也只夫くの家業と大切ふ勤矣親兄弟を事こ飢を凌ぐ程の勤へいのく八刻ふ欲とかく百くべ一生を金銀を持てかえて苦ること多る人多愚なるもの形りの程ふ不ふ連も浮世のそ形く虎ふきの雲上ハ塵ぶ如ふ義ふ且ハ我ふ物のそくら久ふ雲の如しと古人ふいえり世ふ行ものハ雲ぶ如し今日ふ富ふ有とも明日ハ貧ふ成べ

と知りつゝ不義の金銀を貪るべくんば

一百三十六地獄とハ皆我ふ作り出ふ俱将神　牛頭　牛頭阿防羅刹の鉄の山三途の川火の車近ふ来り

[illegible]

相撲改正金剛傳 [illegible] 陽齋豊國画 [illegible]

力競表裏相撲取組圖會 [illegible] 作 [illegible] 画 全一冊

實語教童子教餘師 [illegible] 全一冊

增補繪本實語教童子教餘師 [illegible] 全一冊

畧画手本淨瑠璃圖會 [illegible] 筆 全一冊

嘉永 東都書肆 [illegible] 月内刊 [illegible] 橋銀座四町目 頂恩堂 木屋文助 [illegible]